

持ち運べる音楽

この原稿を書いている私の耳に飛び込んでくる音は隣の神社の春祭りの「だんじり」のお囃子です。コンコンチキチと鐘や太鼓や半鐘の賑やかな音が演奏会場以上に活きた音楽として聞こえます。勿論年中毎日やられたら私も引越を考えますが、年に数回のこの行事は地域の風物詩であり子どもの思い出作りには欠かせないものです。

マリーシェーファアのサウンドスケープにはピタリこのだんじりの練り歩きがもし音もなく肅々と街中を通過したら伝統行事として盛り上がったでしょう。

視覚と違い、聴覚はその対象を選択的に拒否したり選んだり出来ません。聞きたくなければその場から離れるか、耳を塞ぐしか方法がありません。にも拘らず街中にはサービスのつもののBGMや客寄せの大音響の音楽などが氾濫しています。一度でもこの視点で海外旅行をしたならば、ヨーロッパなどの都市の静かさに気がつくでしょう。

いつの間にか我が国の若者は音楽ではなく【音響依存症候群】に犯されていることがわかります。ジョギングしながら、運転しながら、通勤の車中でと常に一人の孤独な行動にはモバイルミュージックがお供をしているようです。「～しながら」の【ながら音楽】はテレマンの時代にも食事のBGM等がありましたが、移動しながらというのは20世紀最後に出現した新しいライフスタイルです。

果たして彼(女)等にとって【ながら音楽】はどんな働きをしているのでしょうか。

- 1, 外界から遮断された個人の世界を作る。
 - 2, 無音空間の補填材として。
 - 3, 孤独感を癒すため。
 - 4, 何かが鳴っていないと不安だから。
 - 5, 聴きたい曲とずっといっしょに居たいから。
- 等色々あると思うのですが、大きく分けて【無目的】なもの【目的を持つ】ものに分けられます。

無目的な音楽は音としての性格が強く、とにかく何かが鳴っていないと脳のドーパミン分泌が不安定になり、イライラしたり、無気力になる人を癒す働きがあるようです。この場合【音】の情報が【音楽】の情報を上回るので、ビートの効いた音とか、

きれいな音とかを選択します。

一方目的を持つ音楽は【音楽】の持つ情報を使いますので娯楽的内容や、ムードを利用します。

音楽を持ち運べるようになったことで、学校における音楽教育も様変わりしてきたことを認めざるを得ません。

伝統的な音楽鑑賞のスタイルである「演奏会」は自分が主催者の都合で決まっている日時や場所に合わせ移動し、期待に胸を膨らませて日常でない自分をそこに座らせるという儀式的要素がありますが、欠点として、聴きたい時に聴きたい音楽を聴くという要望には応えて貰えません。王侯貴族だけがかなえることのできたこの要望をかなえてくれたのがエジソンによるレコードの発明です。

本来一過性の音や音楽に触れる体験を記録して随時再現できるというこの機能は、風景を記録する写真術や瞬間の風景の連続を動画に変える映画の技術を生み、さらにその動画に音も付けるという今日のムービーやビデオの基本コンセプトを生みしました。

しかし一方では、ステレオ装置に何故スピーカーが二つ要するのかや、音響再生装置のカタログの読み方も判らない世代が、とにかく「これを押したら音が出る」とか、「ボリュームつまみで音楽のフォルテピアノが表現できる」などと信じてしまう音楽以前の状態に置かれてしまったことも事実です。

Mの教育は録音技術や装置のハイテク化によって、表現される音楽の内容よりも「音の良さ」に人々の関心を向けてしまった面も否めません。

ピアノの音楽はペロシティ 持続時間 タイミング ペダルの4つしか情報がありません。音が良いとか悪いとかのパラメータは【楽器の責任】の一部に過ぎません。【演奏者の責任】で発生するダイナミックやテンポやバランス等の微妙な変化こそがその演奏者の個性であり音楽なのです。国産のピアノより舶来のピアノの方が良いという場合の「良い」は音が良いという派と演奏者にとって良い派に別れていますが、実際には演奏者を殺してしまうような音の舶来ピアノのコンサートに何回も行ったことがあります。外車の方が優れている等という神話が崩れてしまったの同様、【イワシの頭も信心】みたいなハイテクによるオーディオマニアの信心も困ったものです。